

JIA news kinki

翔  
syo

no.099/2006

夏号





表紙写真：大原美術館  
(撮影 - 上田恭嗣)

## 表紙解説 - 大原美術館

大原美術館正面には、シンプルなペディメントとエンタブレチュアを支える四本の柱が設置されている。両端には角柱が配され、中央の二本の柱はイオニア式柱頭が採用されている。これらは、石造ではなく、鉄筋コンクリート造の洗い出し仕上げである。

正面玄関の屋根は、ペディメントの形状から切妻屋根であるが、後方の本体部分は陸屋根で構成されている。しかし、昭和5年の着工当初は、全体が切妻屋根で赤いS字瓦を葺くことで建築が進められていた。

## CONTENTS

### 特集

#### 「JIA顧客支援システムの近況報告」

青砥聖逸 3

### 連載

「和のこころ」(新連載) 佐藤洋司 5

「住宅部会通信2006」 鈴木道子 7

吉村篤一 7

「建築家の視点」 三輪泰司 8

「都市点描」 八木康行 10

### 情報

#### 新入会員紹介

「編集後記」 小南一郎 12

## 地方に生きたアール・デコの建築家 - 薬師寺主計

### その9 大原美術館

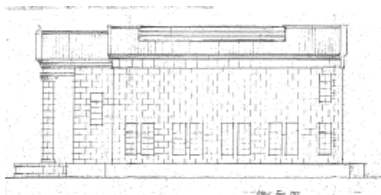
岡山県内でも大原美術館(1930年)の設計者については、ほとんど知られていない。一般に建築家の作品は評価されても、その建築家個人についての評価はあまりなされていない。建物を建てた大原孫三郎(1880-1943)と、大原のもとで大原美術館の近代西洋絵画を蒐集した児島虎次郎(1881-1929)の存在は、地元ではよく語り伝えられている。しかし、岡山に生まれた郷土の建築家が大原美術館を設計していると伝えられると、大変驚かれる。

今回取り上げた大原美術館は、薬師寺主計が建築家としての使命を、最後に最大限に果たした作品である。実は、大原美術館は薬師寺主計の提案なしでは、今日における倉敷の美観地区に建築されていなかった。薬師寺の発案で、現在の位置に建築されることに急遽変更となった経緯がある。それまでは、児島が、倉敷の中心部から北西に約2.5キロメートルほど先の、高梁川近くの酒津(大原から与えられた児島の居宅があった地)に建築することで進めていた。児島の急逝後、児島の偉業を称えるため大原が建築を決定したが、着工直前に建設地を変更している。

薬師寺主計は、昭和5(1930)年秋に昭和天皇を迎えて挙行された岡山・広島(福山)での陸軍特別大演習に照準を当て、現在の敷地に建築を決定させたものと考えている。このタイミングを逃すとおそらく、経済的かつ時代的背景から、大原美術館は建築できなかったであろう。現在、大原美術館が建っている地には、薬師寺の建築作品である有隣荘(1928年)・粟農土地株式会社本社事務所(現、喫茶エル・グレコ:1926年)・今橋(1926年)・第一合同銀行倉敷支店(現、中国銀行倉敷本町出張所:1922年)等が集積しており、この地に薬師寺が美術館を建てることにより、彼の抱いた街並み風景を創り出すことができると考えたに違いない。

しかし、この建物にはアール・デコの表現はほとんど消えている。西洋の歴史様式に渡欧後、否定的であったにも拘わらず、ローマ建築様式であえてこの美術館は表現された。この謎解き等は、これからの課題でもある。ところで最近、大原美術館の建築計画で意外なことが判明した。それは、昭和5年の春に着工された時の屋根の構造・形態等が、今日姿を現しているものとは違っていたことである。工事途中で設計変更を急遽行い、今日の姿になっている。当時は、予想外の立面で構想されていた。美術館の屋根はすべて切妻で、なんと赤いS字瓦で計画されていたことが筆者の研究によって明らかになった。瓦屋根に硝子のトップライトを計画していたが、これを途中で変更している。

地域の建築を研究することは興味深い。これからも、地域に生きた建築家の評価を微力ではあるが続けて参りたい。長期にわたり連載させて頂き、感謝申し上げます。



工事着手時の立面図(側面)

参考文献：上田恭嗣「アール・デコの建築家薬師寺主計」山陽新聞社2003  
(ノートルダム清心女子大学人間生活学部教授・会員 上田恭嗣)

## JIA顧客支援システムの近況報告

青砥 聖逸  
(JACSS運営委員長)



会員の皆様にはJACSS(JiA Client Support System)の存在をどれほどご存知でしょうか？民間の建築家紹介システムが数多くある中で、私達JIA近畿支部独自で行う一般市民に対する支援システムです。本年度の支部活動の一角として期待されている委員会でもあります。

JACSS運営委員会は毎月一回開かれ、実務的な対策と広報活動の充実を図ろうと、日々努力を続けております。

昨年3月20日にインターネット上で開設した相談窓口です。建築家の存在と職能としての役割を、少しでも多くの方に知って頂くための活動です。

開設早々にお話があった、女性二人暮らしの住まいも、実施設計が終わり6月21日に着工しております。JACSS第一号の住まいとして、今年の10月末には完成する予定です。施主の諒解を得ればオープンハウスを開催したいと願っております。流石にインターネットらしく、問い合わせは北欧のスウェーデンからもあり、日本での別荘として、土地探しからお願いしたいとの要望も受け入れ、建築家との面談とその準備をしているところです。実現しなかった物件も数件ありますが、新たな問い合わせも徐々に増えつつあります。(注1)

民間企業やその他の法人からの協力依頼もあります。但し、登録建築家の使用基準(理事会承認済み)(注2)を満たすことを条件としております。具体的には株式会社ホームプロ(注3)との協力体制を検討中です。工事費が1000万円を超えるリフォームが増えつつある中、建築家の役割と関わりを求める要望に対して、広報力に欠けるJACSSとしては、何らかのかたちで協力体制をとりたいと願っている次第です。

手軽なインターネット上だけの広報だけではなく、JACSSのチラシを作成して、ことあるごとにPRしているのですが、まだまだ力足りません。そこで本年度は地域会の協力を得て、その地域の建築家の作品の紹介と無料相談会を開催する計画を立てました。地域限定型で定期的に行うことにより、私達の存在と役割について、より一層の理解を得たいと願う作戦です。大阪ガスなどは「私達に出来ることがあれば何なりと協力致します。」と言って頂いております。更にお忙しい中、運営委員会へもしばしばご参加頂きました。

最近では、幾つかの雑誌にも取り上げてくれました。コンビニエンスストアの店頭にも並ぶ、(株)ザネットが発行する「住まい net 関西」では、建築家のつくる空間の特集号にJACSSのホームページが掲載されたり、新建築家技術者集団発行の「建築とまちづくり」では、「建築事務所は生き残れるか？住まいづくりにかかわる建築家のあり方を問う」のテーマで、JIA顧客



JACSSホームページ(トップページ)  
(URL: <http://www.jacss.jp>)



JACSSサービスの流れ

## JIA顧客支援システムの近況報告

支援システムの記述を、委員長として私が執筆依頼に応じました。支援建築家（JACSSの登録建築家のことです。）は現在23名ですが、これも呼び掛けはしているのですが、中々増えておりません。厳正な審査のもと、登録して頂いているのですが、家を建てたい人達に対するサービスとしては、最低50名程度の支援建築家が必要です。本年度より運営委員会のメンバーも一新し、数名の方には支援建築家として、申請をされるようお願いしております。どうかこれを機会に多くの会員の皆様に、支援建築家として応募して下さいます様お願い申し上げます。一人では出来ない可能性を、皆様のご協力により一步一步前進するJACSSに大きな期待をしております。

（注1）

JACSSホームページへのアクセス数：2005年度12,426件。2006年4月1日～6月27日現在3,263件。

（注2）

### 1．法人の形態

- 公益法人（社団法人、財団法人、特別法に基づく広義の公益法人）
- 非営利法人（中間法人等）
- 公益性のある営利法人（電気、ガス会社等）
- 上記の 出資による営利法人

### 2．経営状態

- 法人設立から5年以上経過していること。
- 経営状態が安定していること。
- 事業目的が公益性を持っていること。
- 過去に法令違反が無いこと。

### 3．使用目的

- 当協会の定款上に適っていること。
- 当協会の憲章、倫理規定、行動規範を逸脱しないこと。
- 登録建築家の品位等を毀損するもので無いこと。

（注3）

リクルート・大阪ガス・NTT西日本・NTT東日本の出資による、リフォーム仲介サービスを行う会社。



支援建築家紹介ページ



PR用ちらし

## 『和の建築とインテリア』

佐藤 洋司

(四天王寺国際仏教大学)



古来より、日本は中国からの影響を受けつつも独自の文化を育んできた。国語の語順から鋸の引き方までおよそ西欧諸国とは正反対になっている事項も随分あるし、逆に同時並行的に生活の必要に応じて生まれた事項もある。ここでは、和の建築やインテリアの意義について考えてみたいと思う。

< 『日欧文化比較』に記されている日本の家屋 > (註1)

天正13(1585)年にイエズス会宣教師ルイス・フロイスがまとめた『日欧文化比較』には、ヨーロッパと対比する形で日本の家屋・建築・庭園に関して述べた章がある。その冒頭に次の様な比較文が書かれている。「われわれの家は高層で数階もある。日本の家は大部分低い1階建である」、さらに「われわれの家は石と石灰で造られている。かれらのは木、竹、藁、および泥でできている」とあり外国人が見た日本の住居は、木、竹、藁、泥、などのどこにでもある自然素材でできた平屋建の建物という事になる。これが当時の和の住居であり、化学物質が氾濫する現代において改めてこの清らかな住居を認識するのも重要な事ではなからうか。また次の様な記述もある。「われわれの扉は大抵扉を取り付ける柱の上を動く。日本の扉はほとんど敷の上を走る」すなわち西洋ではほとんどがドアであるのに対して、日本ではほとんどが引戸であるということを述べている。常々引戸は日本の発明品ではないかと思っているが、近年引戸が再評価され、浴室のドア等も引戸に変わりつつあり、引戸こそ世界に誇れる和の建具の代表格だと思っている。

< 茶室と数寄屋 >

前出の『日欧文化比較』では茶室について次の様に述べている。「彼らの茶の湯の部屋は自然を摸して、森から持ってきた様な木材で作られている」あるいは「茶の湯の座敷には窓がなく、暗い」。たしかに茶室は一般の建物よりは暗い。又、中には2畳に満たない小さな部屋もある。ルイス・フロイスにしてみれば極めて不思議な空間であったかもしれない。しかし、「自然を摸して」作ったと云う点は極めて的を得ている。茶室は一見自然体に見えるが、実は様々な作加えられており様々な作法が決められているのである。例えば、貴人口や躰口があることで程度の差はあれ総ての客が茶席に入る時



写真1: 玉林院茶室正面左に躰口、屋根に突上窓がある。

に頭を下げなければならないし、茶席に入り終えた時は最後の人はわざと音をたてて躰口の掛金をかけねばならない、これもルールの一つである。また天井にある突上窓にしても茶室に景をそえるためにあるだけではなく後入りでの明かり取りとして大きな役を担っているのである。

茶室ではあらゆる物が計算づくで作られておりそうした点から考えると、茶室は和の建築としては一つの特解であるかもしれない。しかし、それだけに周囲に及ぼす影響は多大なものがあり、そうした中から生まれた数寄屋建築は茶室に比べるとデザイン上も工法上もはるかに自由度が高くそれ故連続と今日まで続いてきたのであろう。そういった意味では数寄屋建築は、今日なお和を代表する建物と云えるかもしれない。

# 和のこころ

## <和のインテリアの卓越性>

ワンルーム、ベッド、ロールカーテン、パーティション、フロアスタンド、ジュータンなどは明治維新になってから日本に入ってきたと思われがちであるが、実は平安時代にすでに存在するものばかりである。試しにこれらの用語を「和」の言葉で書き直すと次の様になる。すなわち、寝殿造、帳台、壁代、几帳、灯台、畳、この様に書くといささか優雅な雰囲気になったのではないだろうか。いずれも、寝殿造に関係の深い物ばかりである。ちなみに、ルイス・フロイスは西洋の大絨毯に対するものとして畳の事を藁のマットと呼んでいる。日本は様々な面において独自の発展を遂げてきた。ここで取り上げたインテリアの構成要素も当然ながら日本独自の発明品である。しかもデザイン的にも機能的にも、すばらしい物を持っている。

たとえば、天蓋付のベッドである帳台は方1丈程の寸法があるが組み立て式になっており、分解して自由にどこへでも運べる工夫がされている。しかも帳台を構成する要素は浜床・畳・天井の明障子などを含めて10以上にも及ぶ複雑さである。又、壁代は主として母屋と庇の間の間仕切として御簾と共に長押し垂らすものであり、上げる時は下の袋になった所へ板を入れて巻き上げるのである。布全体に草花や鳥などを描き布を縫い合わせた部分ごとには飾りの紐を垂らし風のそよぎに優雅にゆれ自然界の一部であるかのごとき振る舞いをする。このあたりが他国に追従を許さない本来和の持つ繊細な感覚の表出であろう。こうした平安時代の優雅さに対して、江戸時代になるともはや平安時代の自然と一体となったインテリアはなりを潜め、数寄屋建築のインテリアとして様々な技巧が凝らされたものが現れる様になる。カラフルなインテリアも現れ、特に遊郭の建物に傑出する。壁に螺鈿を埋め込み、七宝くずしの文様としたもの、部屋の様々な部分に扇のモチーフを使ったもの、また壁一面に紅葉の葉を埋め込み自然の中にいる様に感じさせる部屋にしたものなど様々な新しいインテリアが現れ、平安時代とは異なる和の工芸品とも云うべきインテリアとして仲間に加わってきたのである。

以上に述べたのはこれまで日本が培ってきた和の建築やインテリアのほんのわずかな部分にすぎない。それにもかかわらず、多大なインスピレーションをわれわれに与えてくれる。日本は他国に比べて極めて繊細な情緒に富んだ国であり、それゆえまだまだ和の中に学ぶべき事柄が残っているのではなかろうか。

(註1) 『日欧文化比較』岡田章雄訳・注

図1～図3は『家具』小泉和子著、近藤出版社刊より

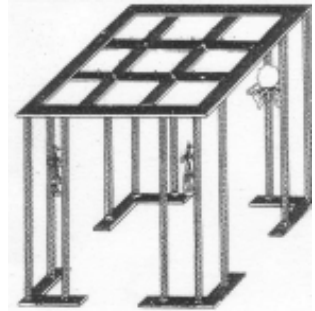


図1：帳台の骨組（浜床の上に置く）



図2：帳台の帷（骨組の周囲にたらす）

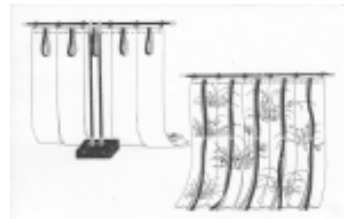


図3：几帳の裏（左）と表（右）



写真2：角屋青貝の間（七宝くずしの模様）



写真3：角屋扇の間（扇形の欄間と天井の扇面）



写真4：輪違屋もみじの間

## 住宅部会通信 2006

1月例会（2/2開催）

堀木エリ子さん講演会のご報告



鈴木 道子

(M. I. A. ARCHITECTS)

いつもと違う会場（市立総合学習センター）のため果たして人数が集まるか心配したが、当日は50名も来て頂き、内会員外が過半数といった状況であった。約2時間、ずっと立ちっ放しで作品などの写真を見せながら手漉き和紙の魅力を熱く語られた。その中で、ご自身の経歴や仕事への情熱、取り組み方など、その一途な情熱と社会貢献をも視野に入れた活動範囲の巾広さに深く感じる場所があった。

“神に通じる白い和紙”という和紙の原点を大切にしながら創作していかれる新たな和紙の世界、魅力について語られる時、女性らしいきめ細やかな優しさや繊細さを垣間見せ、又次々と難題に挑戦しどんどん大きな世界へ臆せず飛び込まれていく様子に大胆さとしなやかな強さを感じさせ、彼女の魅力にどんどん引き込まれてしまったのは私だけではなかったのではと思う。彼女の語る和紙の世界、作品群も素晴らしかったが、同性としてその生き方に羨望の念を抱きつつ大いに元気付けられたあという間の楽しい時間であった。

(鈴木道子)



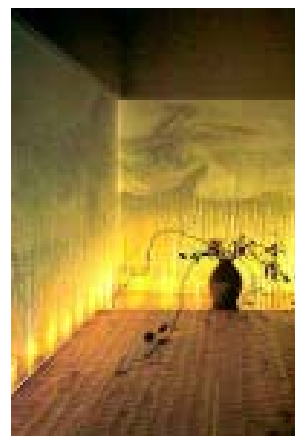
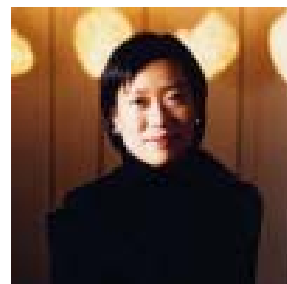
吉村 篤一

(建築環境研究所)

京都生まれの大阪育ちという生粋の関西人で、“和紙ディレクター”という肩書きの堀木エリ子さんは「建築空間に生きる和紙造形の創造」をテーマにスケールの大きい和紙の可能性を追求してこられ、最近では国際的にも活躍されている。堀木さんが銀行員の時代から和紙に興味をもち出したきっかけや、さらにその後の仕事の取り組み方など、生い立ちから和紙造形の数多くの作品について、たっぷり2時間エネルギーに話していただいた。大変流暢でわかりやすい話し振りだったので、聴衆はその話に着きつけられ、大変魅力的な講演会となった。長さ10メートルにも及ぶ長い和紙を漉くことができるという話には一同びっくりさせられたし、最近作のそごう百貨店のダイナミックな巨大オブジェ（照明器具のようでもある）から、住宅の照明にも利用できるような小ぶりのものまで多様なデザインのものがあることもわかった。講演会が終わってからの懇親会も和やかに11時頃まで話が弾み、楽しく有意義な夕べを過ごさせていただいた。感謝！

後日、京都の町通りを歩いていたら、町家風のインテリアショップのウィンドウに例の小ぶりの照明器具が展示されているのを見つけ、これはいけるなと思った。

(吉村篤一)



掲載写真：堀木エリ子氏のHPから抜粋

<http://www.eriko-horiki.com/>

## 「建築家はなにをなすべきか」

三輪 泰司

保存再生委員会  
(アルバック・地域計画建築研究所)



一昨、平成16年3月、「景観法」が制定され、昨年6月に全面施行されました。これは、建築の保存再生にとって画期的なできごとです。第2条の基本理念は、良好な景観の整備と”保全”を図る意義を5項目に渡って示しました。第7章に罰則もあります。

### 攻勢に転じた行政

京都市は今年5月、都心のいわゆる「田の字」内の建築物の高さを15mに押さえると発表しました。6月には祇園町南側にある幅2.7m内外の9つの小路で、建築基準法第43条第2項によるいわゆる免除条例を制定してセットバックしなくてもよいようにすることを発表しました。これは、一昨年2月、国土交通省が免除の条件に景観も含めると通達したことを受けています。

都市計画法、建築基準法には美しい都市をつくるとか、由緒ある建築物をまもるとかは書かれていません。そもそも最高法である日本国憲法にも示されていません。因みに、同じ敗戦国で、わが国より破壊を被ったイタリアではどうか、共和国憲法第9条で自然と文化の遺産を守り、芸術・科学の振興に努めることは国家の責務としています。

わが国は、根本の改正より、いわばなしくず的に改め、実行して行くのが得意です。

近畿を中心に見ますと、”環境と文化”が燃り合わさっています。

関西財界が力を入れてきた歴史街道、平成6年12月の京都の文化財・清水寺、平等院などの世界遺産登録、平成9年12月、COP-3、京都議定書、平成16年7月、紀伊山地の霊場と参詣道の世界遺産登録と盛り上がってきて、法律ではないけれども、平成15年12月の「美しい国づくり政策大綱」という”宣言”がひとつの山、それでもって国と地方は、いっせいに、保存再生行政に前進しました、と後世、解説されるのではないのでしょうか。

その”地方”で、最も苦勞し、最も先を拓いたのは、やはり京都です。

### 京都の苦闘と支援

京都には「美しい場所はあるが、美しい都市ではない」「お寺はきれいだが、街はきたない」。外国の学者や、ジャーナリストにこんなぐあいに行われてきました。市民もそう思っているから反論できない、市の職員も腹が立つが、根拠となる国法がないと動けない。まず、宣言と応援がほしい。それを受けて着々と手を打つ。今年3月に発表された、「時を超え、光輝く京都の景観づくり審議会」（座長：西島安則・元京都大学総長）の「中間とりまとめ」は、あとがきで、”時間との闘いだ”と悲痛な叫びをあげています。

日本建築学会は、「京都の都市景観に関する第二次提言」をまとめ、6月8日、榊本市長に提出しました。平成14年3月の提言に続いての提言です。建築



## 建築家の視点 保存再生を考える

学会がこのように、応援して頂くのは、ありがたいことです。では、建築家と建築家の団体であるJIAは、どのような取組をし、行動すべきでしょうか。我々は、解説者や評論家ではないのです。

### 建築家とJIAの使命

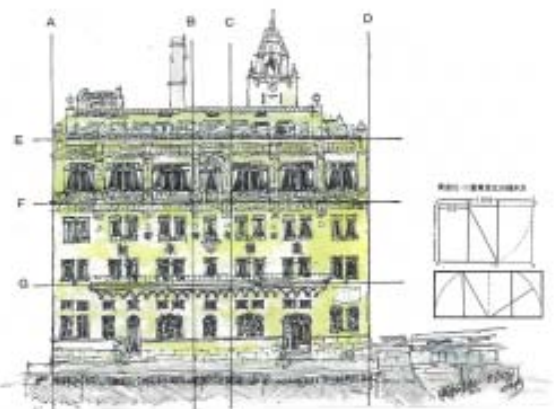
行動の第一は、住民とともに、地域での保存・保全のために働くこと。祇園でも、2項道路沿いの伝統的な建築が保存できるようになるには、平成11年に全域で地区計画を定め、6月に歴史的景観保全修景地区の指定をしていたからです。そこには、十数年、地元まちづくり協議会で奉仕してきた建築家・プランナーが居るのです。絶対に、知識と技術を持つコーディネーターが必要です。それは、排除の論理ではなく、地域共生、共存共栄の精神で、リードする奉仕活動です。平成9年に設立していた(財)京都市景観・まちづくりセンターは、景観法第5章の景観整備機構になりました。全国第1号の半公共コーディネーターです。建築家は何処にでも住んでいるのですから、自分のまちで、建築協定・地区計画からやってはどうか。地元で信頼され、人望があるかすぐ判ります。

まだ、建築家だけでは出来ない課題があります。防災・防火の技術開発、税制改革、活用・流通システム、そしてまちづくり協議会の後継者育成などです。第二は、より専門的なデザイン・ガイドです。それは、法律で決めてもらうものではなく、建築家或いは建築家の団体が自主的につくり、自律的に使うためです。現実はどうですか。圧倒的な”建築士・設計士”は、手すりの高さは、1.1mと基準法の定めで寸法、即ちデザインを決め、採光面積がこれだけ要るからと、メーカーのカタログで開口部をデザインしています。圧倒的多数の建築士事務所は、伝統様式を勉強したり、近代建築の社員研修をしているヒマはありません。それで、建築学会が言われる「景観阻害建築物等」を日々、大量に再生産しています。

「ダ・ヴィンチ・コード」が話題を呼んでいます。我々の先達も黄金比やフィボナッチ数列を知っていて、使っています。人間が美しいと感じるには、やはり心地よさからでしょう。

四条大橋の西岸に、ひととき異彩を放つW.M.ヴォーリス先生設計になる建築をスケッチして解析して見ました。

伝統・近代の建築写真集もけっこうですが、建築家の団体は、建築家らしく、そして”建築士・設計士”とも共生し、役立つために、美しくつくる方法のガイド付き「建築デザイン・アーカイブ」をつくってみたいと思っています。



「東華菜館」にみる ” ”

## 「ヤオトン(窟洞式住居)と平遥古城」

八木 康行

(都市デザイン委員会委員)



この春5月に住宅部会の企画で中国河南省のヤオトンと山西省平遥の城郭都市を訪れる機会を得たので、都市と住まいという視点からご報告させていただきます。

我々が訪れたのは、上海から飛行機で1時間半ほど内陸に位置する河南省、山西省です。ちょうど二つの省を跨ぐように中国第二の大河である黄河が流れており、辺り一帯黄土高原の渓谷が広がる中、ひたすらポプラ並木が連なる高速道路を移動しました。車窓の外からは時折、渓谷の谷間にへばりつくように小さなヤオトン住居の洞穴がちらほら散見され、現代においてもヤオトンが、この辺り一帯の集落に見られる一般的な住居形式であることがよく分かります。現在でも数千万人以上の人々がこのヤオトン住居に住んでいると言われていました。

中庭形式の住宅は、世界中のどんな都市や遺構でも見られる都市住宅における最も有効な住居形式ですが、ヤオトンの特徴は、黄土高原の厳しい気候風土を反映して、粘性度の高い大地を中庭型形式に掘りさげ、さらに四方に横穴を掘り進めることで各居室を確保した、言わば地下住居であることです。渓谷に面した所では斜面地を利用した横穴式のヤオトンも数多く存在しています。夏場で40度以上、冬場でマイナス20度には下がるという厳しい環境の中、その中庭に囲われた横穴形式の居室に入り込むと心地良い空気のおよみのなかで、ある安定した室内環境が保たれているのが体感できます。

最初に訪ねたのは、洛陽近郊の村の中にある200年程前に築造されたヤオトンでした。目測ですが、平面的に約15メートル×20数メートルの長方形で深さ約10メートルの中庭をもつ住居でしたが、間口3メートル、奥行き10メートル程の居室が短辺で3室、長辺で4室ずつ穿たれたものでした。そのうちの1つが地上からおりてくるアプローチをかねたトンネルになっており、中庭には数本、樹木がシンボリックに植えられていました。ここの住人は90歳をこえるおばあさん一人で、かつては大勢の家族や親戚が住んでいたそうです。この村では打ち捨てられて半分埋められたヤオトンも見られ、かつて地下住居に住んでいた多くの人々が、コンクリートとレンガで地上に建てられた現代の住宅に移り住んでいました。都市化の波がこうした地方の村にも押し寄せているのが分かります。生活する上での一番の不便は、便所がヤオトン住居内に設けられていないことが挙げられるでしょう。地下の中庭には料理炊事や生活雑排水を促す竪穴排水口がありましたが、汚水を流す術がなく、地上部の所々に壁で囲われただけの簡素な共用便所が設けられています。翌日訪ねた三門峽の集落にはヤオトンが数多く残り、比較的新しいヤオトンも見ることができました。ある新婚ご夫婦の部屋も見せて頂きましたが、地下住居という感じは全くなく現代の住まいのインテリアがそのまま横穴の居室に移って来たという感じでした。中には壁紙のかわりに牛乳パックを



洛陽近郊のヤオトン



食寝一体の居室内部



三門峽のヤオトン



牛乳パックの家

## 都市点描

使って壁天井全面貼り巡らせたような部屋もあり、なかなかシニールでモダンなインテリアのヤオトンが見られて、建築家一同に新鮮な驚きを与えてくれました。ただこうした数多くのヤオトンが残る村でも、ここ20年ヤオトンが新しく築造されていないとのことで、中古で売買されて改装しているそうです。あと10年もすれば多くのヤオトン住居は消えてなくなるのかもしれませんが。現に村の入り口には衛星放送を見るための巨大なパラボラアンテナとソーラーシステムが屋根に据え付けられた新築の住宅が数多く建てられ、その新旧の対比が現代の中国の有り様をまざまざと物語っているようでした。

河南省から山西省へと移動し、平遥という街を訪ねました。ここは1997年にユネスコの世界遺産にも登録されている「平遥古城」と呼ばれる城郭都市が中心にあり、明、清時代の漢民族が作り上げた古い街並がほぼ完璧な状態で残っています。築城の歴史は2700年前の西周時代にさかのぼるそうですが、外周約6.2キロメートルの城壁が取り囲む街の骨格は、城門から続く「于」の字形に交差する大街路で構成されています。この東西南北の大通りを挟んで商店や宿が軒を連ね、中心付近に市楼と呼ばれる櫓建築が設けられ、中心市街地のあたりを見渡すことができます。街の様子は、中国各地や世界中から観光客が訪れ活況を呈していました。街路に対して平入りの切妻屋根が連なるその完璧な街並は実に美しいもので、本当に一瞬タイムスリップしたかのような錯覚に陥ります。江戸時代までは、日本の江戸や大坂といった城郭都市もこういった雰囲気だったのではないかと、以前見たベアードの写真の記憶が蘇ってきました。何ゆえにここまで完璧な状態で、歴史的街並が保存されたのかと不思議でしたが、スルーガイドのウーさんが解説してくれました。平遥は元々商い取引で中国全土に名を馳せた山西商人の街で、「票号为替」と呼ばれる貨幣為替制度を中国で初めて打ち立てた商店「日昇昌」が発足し、それら金融機関が中国清朝政府を顧客に持ち日本や朝鮮にも支店がある程までに成長したそうです。ところが、清朝が倒れて西洋式の都市銀行の為替取引に移り、1910年から20年代に瞬く間にこの金融街がつぶれてしまい、経済的ダメージが大きすぎて街の更新に投資する余裕がなく幸いにも古い街並が残ったということでした。こうした明、清時代の城郭都市は他にもあったにも関わらず、その過激な経済的浮き沈みのおかげで、平遥だけが完璧な歴史的街並を継承し、今又世界遺産の観光都市として賑わいでいるという皮肉な歴史的巡り合わせに、都市と経済活動の密接な関係に思いを馳せずにはられませんでした。我々一行は、城郭の外の近代的ホテルに宿泊しましたが、もし行かれるならば、城内にある当時を忍ばせる活きた世界遺産である四合院形式の宿泊施設に泊まって、街のリアルでレトロな時空間を堪能されることをお勧めいたします。

平遥市街地地図

出典：『中国世界遺産の旅 第2巻』講談社



平遥古城城壁



四合院形式の住宅



ヤオトン風インテリアの木造住宅



市楼を望むメインストリート



市楼から見渡した平遥の街並



## 新入会員紹介

兵庫県	坂井 信夫	坂井建築事務所	大阪府	勝山 太郎	日建設計
兵庫県	嶋崎 真二	なづな工房	大阪府	北川 明	日建設計
兵庫県	谷ノ口義弘	谷ノ口義弘設計スタジオ	大阪府	木下 正裕	梓設計 大阪支社
兵庫県	矢代 恵	M E G 建築設計事務所	大阪府	穴道 弘志	坂倉建築研究所大阪事務所
			大阪府	須部 恭浩	三菱地所設計
大阪府	荒木 公樹	空間計画	大阪府	清 孝好	日建設計
大阪府	荒谷 省午	荒谷省午建築研究室	大阪府	塚口 明洋	塚口明洋建築研究室
大阪府	井上 久実	井上久実設計室	大阪府	中川 洋一	安井建築設計事務所
大阪府	上原 徹	日建設計	大阪府	橋本 頼幸	こま設計堂
大阪府	小河原 一郎	小河原建築設計事務所	大阪府	板東 義雄	日設建築事務所
大阪府	太田 修司	オキ建築設計室	大阪府	堀川 晋	日建設計
大阪府	岡田 耕治	日建設計	大阪府	山家 弘	安井建築設計事務所

## 編集後記

各地に記録的な雨を降らせた今年の梅雨は、例年より1週間も遅れてようやく明けました。

その後の暑さもまた記録的で、連日、各地で35℃を越す猛暑となり、地球温暖化によるダイナミックな気候変動がいよいよ本格化してきた気配を肌で感じます。映画「デイ・アフター・トゥモロー」が予告した温暖化の進行による海流異変が地球の氷河期化を招くというストーリーはあながち間違っていない、という専門家の見解を先日読み、私たち一般市民レベルでも、もう少し真剣に議論すべきときが来ているように感じる今日この頃です。

さて、JIA近畿の機関紙「翔」が発刊して4年、WEB版として支部HPに登場して1年が過ぎました。

冊子として会員の皆さんにお送りしていた時とは違い、全ページがフルカラーで構成され、デザイントークや、連載、特集記事の図版、写真が生き生きと感じられ、内容も充実して参りました。

今後より面白く役に立つ機関紙として編集努力してまいりますので、皆様のご協力をよろしくお願い致します。

次号より、表紙は大江一夫さんの水墨画に変わります。岡山ノートルダム清心女子大学の上田恭嗣先生には2年間本当にありがとうございました。この場を借りましてお礼申し上げます。

また、現在、タイムリーな情報提供としてFAX&MAIL通信「翔」（毎月1日）およびメールマガジン「翔」（毎月20日）を会員の皆様を中心にお送りしております。

ご意見・ご希望がございましたら、事務局または、広報委員会にご連絡ください。よろしく申し上げます。

(小南 一郎)

## 広報委員会

委員長 小南一郎（大阪）  
副委員長 小池啓夫（大阪）横関正人（大阪）  
委員 一尾晋示（大阪）井上 守（大阪）大江一夫（住宅部会長）  
太田恭司（大阪）木戸口浩之（京都）佐々木純一（大阪）  
佐藤洋司（大阪）柴田敬四郎（奈良）内藤 正（滋賀）  
橋本雅史（和歌山）森崎輝行（兵庫）  
事務局 穴井宏樹 木田明生 緒方英輔  
発行日 2006年8月7日（夏号）  
発行人 吉羽逸郎  
発行 社団法人 日本建築家協会近畿支部  
〒541-0051  
大阪市中央区備後町2-5-8 綿業会館 TEL06-6229-3371 FAX06-6229-3374  
ホームページ <http://www.jia.or.jp/kinki>  
メールアドレス [jia@bc.wakwak.com](mailto:jia@bc.wakwak.com)

表紙 大原美術館（撮影：上田恭嗣）